# 戦後の養護施設の内容と役割
## ――須賀川寮の実践を中心に――

# The History and the Role of Children's Home After World War Ⅱ
## Examining Sukagawa Home

菊池　義昭*
Yoshiaki Kikuchi

はじめに

養護施設は，多様な家族問題によって家庭で養育困難になった児童が入所し，日々の生活を保障することはむろんであるが，むしろ，入所の時点から，彼らの家庭復帰，社会参加を可能にする社会的養護の実践が重要である[1]と言われている．彼らが家族と共に又は社会に出て，1人の人間として家庭生活，社会生活を営めるような質を内包す社会的養護を，施設での実践の基本にすることが求められている．その典型的な課題の一つに養護施設を出て家庭を持つが，失敗してその子どもがまた養護施設に入ってくるという，いわゆる養護児の再生産問題がある．

つまり，社会的養護の内容と質が問われているわけであるが，それを明らかにする手がかりの一つとして，養護施設で生活し，現に社会に出て生活を営む彼らが，養護施設で暮らしたこと（身に付けたもの）を，どのように受け止め，何を支えにして生きているか．この点を明らかにできれば，今後の社会的養護のあり方を解明する一つの資料になると考え，本稿ではそれに近づく試みとして養護施設で一緒に暮らし，退所後も彼らの人生を見守れる立場にあった職員のみなさんから話を聞き，その話の中から浮かんでくる社会的養護の内容と役割をまとめることにした．

これらの職員の話には，自らが施設の暮らしの中で彼らに伝えたこと，そして，彼らの社会生活，家庭生活を見守っていて伝えるべきであったこと等が，自らの実践と彼らの成長の相関関係の中で，ある程度客観的にいろんなかたで語られるであろう．そのことをまとめて行くことで，彼らにとっての養護施設の役割と内容を考察し，今後のあり方を考える一資料することが，本稿の目的である．

前述したように，養護児の再生産問題というのは，彼らが家族を持ち家庭をどう作って行くかという課題が，彼らの中で消化しきれないために起ってくる問題であろう．このような問題を含めて，彼らが家庭をどう営んできているかを知るには，現在40才代から50才代の家庭を持つ彼らの，人生を見守ってきた職員から話を聞くことが一つの方法である．今の40才代から50才代の人々が養護施設で育った時代といえば，昭和20年代から30年代であり，まさに，戦後の戦災孤児，引き揚げ孤児の時代である．

本稿では，戦後のこの時期に，福島県立の養護施設として設立され，1965（昭和40）年3月，養護児の減少と共に閉鎖されてしまった須賀川寮で，設立以来御夫妻で児童と一緒に（園内居住）生活してこられた川上為治御夫妻から聞き

*児童学専攻

取りを行い，前記の課題に事例を通して迫ってみる．

## １．川上夫妻への調査とその理由

### １）調査

筆者が川上夫妻のことを知ったのは，息子さんを通してで，第１回目の聞き取り調査は1992（平成４）年４月29日である．この時は，須賀川寮での生活や指導の考え方等を聞いた．第２回目（同年７月20日）は，退所者の事例を含め，寮での生活や退所後時々訪ねてくる彼らとの出合いおよび今日までの生活を，プライバシーに触れない範囲で紹介していただいた．

川上さんは，戦中に満州鉄道に勤めており，身ごもの奥さんを残して応召され，敗戦後ソ連に抑留され，1948（昭和23）年10月帰国した．その後，引き揚げ者住宅等を運営していた安積寮に就職し，県職員の試験に合格し1950（同25）年３月から夫妻で福島県立養護施設須賀川寮（以下須賀川寮と略）に住み込みで勤務することになった．

### ２）理由

須賀川寮の川上為治夫妻が，聞き取りの対象として適切と判断した理由は３つある．

①須賀川寮は，1950（昭和25）年２月10日に設立されるが，設立以来家族で住み込み，児童と一緒に生活し，彼らの養護の中心となり，彼らに最も強い影響を与えていること．そして，彼らは川上夫妻を「おとうさん」「おかあさん」と呼んでいた．

②施設での養護は，日常的な養護にあたる保母の母性と，全体的動きをリードする指導員の父性が必要であり，川上夫妻はその役割を担っていた．その夫妻から話を聞いたことは，児童を母性の立場から見ていた職員と父性の立場から見ていた職員から同時に話を聞くことができ，児童に対する一方的な見方でなく，両方の立場からより客観的で総合的な話が聞けると考えるからである．

③須賀川寮は，1965（同40）年３月に閉鎖されてしまったため，卒園児は，退所後訪れる場所としては川上夫妻宅しかなく，彼らの拠り所が川上夫妻に一層凝縮され，結婚式等にも招待され家族ぐるみのつき合いが続いていること．このため，彼らの退所後の生活を随時見守れる立場にあったこと．

また，閉鎖により，卒園児が一定の時期まで，退所後の動向をつかみやすく，かつ現在，御夫妻は現役を離れ，現実と分離して過去のことを思い出として，ある程度客観的に話せること．

以上が主な理由である．

## ２．須賀川寮のあゆみと概要

須賀川寮は，県立として設立されたため，福島県規則第９号によって次のように規定され，養護施設として認可された．

◎福島県規則第九号

福島県立養護施設設置規則を次のように定める．

昭和二十五年二月二十一日

福島県知事　大竹　作摩

福島県立養護施設設置規則

第一条　児童福祉法（昭和二十二年法律第百六十四号）第三十五条の規定に基づき，保護者のない児童，虐待されている児童その他環境上養護を必要と認められる児童を入所させてこれを養護するため，養護施設を設置する．

第二条　養護施設の名称並びに位置は，次の通りとする．

| 位　置 | 名　称 |
|---|---|
| 岩瀬郡須賀川町 | 福島県立養護施設須賀川寮 |

第三条　養護施設は，次に掲げる業務を行う．

学校教育法の規定による義務教育を終了した児童に対する職業指導

二　児童の日常の指導

第四条　養護施設には，次の職員を置く．

寮長

指導員　若干人

保母　　若干人

第五条　寮長は，知事の命を受けて所務を掌理し，所属職員を指揮監督する．

第六条　指導員は，寮長の命を受けて児童の生活指導並びに庶務に従事する．

第七条　保母は，寮長の命を受けて児童の保育に従事する．

第八条　この規則に定めるものの外必要な事項は別にこれを定める．

附則

この規則は，公布の日から施行し，昭和二十五年二月十日から適用する．

（『福島県報』第2420号1950年1月21日より）

同寮は，1947（同22）年5月に関根義徳が開設した義徳学院（不良少年の入所施設）の建物を改装して開始した．義徳学院は内紛と不正事件のため閉鎖され，その建物の寄附を受けて[2]，初めての県立養護施設として設立された．義徳学院からは建物のみ引き継ぎ，入所児は，県内各地から20名が入寮した．

この時期は，戦災孤児，引き揚げ孤児が多数おり，1948（同23）年の児童福祉法の公布で，県としてもこれらの孤児に対し早急な対応が必要な時期であった．

建物は，寮長室，事務室，女子居室2，男子居室2，指導員室，保母室，調（理）室，炊事婦室，浴室があり，約54坪[3]であった．ただ，男女居室は各2部屋を一つづつの居室として使い，廊下をはさんで寮長室があり川上さん家族が住み，炊事婦室には炊事婦が住み込みでいた．職員は，寮長を須賀川地方事務所長が兼務し，川上夫妻（指導員と保母），事務員，保母，炊事婦の5名で，実際には川上夫妻が中心となって運営に当っていた．

1956（同31）年2月20名の増員が定められ，40名定員となる．これにともない，新に児童室6，保母室2，静養室1，炊婦室1が増築[4]され，職員は全員寮内居住となる．

児童の入退所の状況は表1のようになり，15年間で122名が入所し，毎年4名から10名前後が退所し，同数ぐらいが入所（開設時と増員時を除いて）していた．後半は，児童数も少し増加したが大家族的なホームという規模で運営されていた．

〈表1〉入退所の状況

| | 年 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 入所 | 男 | 17 | 6 | 2 | 4 | 4 | 4 | 13 | 10 | 3 | 5 | 5 | 9 | 5 | 4 | 1 | 0 | 91 |
| | 女 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 7 | 3 | 3 | 1 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 29 |
| | 計 | 20 | 8 | 3 | 5 | 5 | 5 | 16 | 17 | 6 | 8 | 6 | 9 | 7 | 6 | 1 | 0 | 122 |
| 退所 | 計 | 0 | 6 | 4 | 4 | 4 | 4 | 7 | 10 | 6 | 5 | 7 | 6 | 6 | 11 | 9 | 31 | 122 |

『須賀川市史』現代2より

## 3．寮の生活と指導方針

### 1）寮での生活

(1) 1日の日課

6時起床，川上夫人が呼鈴をならすと，ほぼ全員すぐ起きる．すでに炊事婦は炊事を行い，食事の盛り付は川上夫人と保母が行う．

起床後子どもは顔を洗い，各居室，廊下，庭等寮内外の全てを当番に分れて掃除をする．川上さんが確認，あいさつをする．（掃除当番は年齢等を考えに入れメンバーの組み合せをつくり，一週間交替にする）

6時30分ラジオ体操，ＮＨＫのラジオ体操を川上さんが前に出て一緒に行う．

7時朝食，食事を始める前に川上さんから諸注意や町の行事，寮の行事について一言話がある．また，子どもたち全員が集まるので，彼らの顔色等を見て健康状態を確認する．改築までは，男女の居室にテーブルを出して食事をした．

メニューは，ご飯（麦入り），みそ汁，漬物，納豆か卵で，3品ぐらいのおかずであった．食事が終了すると各自食器を洗い場に持って行き，中学生が当番で食器洗い

をした．（消毒は保母等が行う）

食後自室にもどり登校の用意をし，ノート，鉛筆，消ゴム等が必要となる場合は事務室に行き，川上さんから文房具等をもらう．その時，今まで使っていたものを持って行き，まだ，使える時はそれを使うようにさせた．

なお川上さん家族の食事は別で一緒に食べず，食事は公私を区別していた．

7時50分頃登校，小学生は須賀川第一小学校，中学生は須賀川第一中学校へ通学し，幼児は保母が，洗たく，ふとん干，つくろい物をしながら見ていた．小中学生は，昼食を学校で食べたが，最初は弁当で，おかずは毎日ちがったものを入れていった．家庭から来る子どもたちは，毎日同じおかずの時があるのに，寮の子どもたちは毎日変ったおかずで恵まれていると学校の先生方は見ていた．

2時から3時頃下校，おやつ，帰寮すると自分の弁当を洗い，カバンを自分のところに掛け，おやつを食べる．おやつは，ドロップ（15個），せんべい(100ｇ前後)，ビスケット（20枚），ミルク等が日替りで出された．

その後は自由時間で，友だちの家に遊びに行く時は「○○さんの家に○時まで遊びに行ってきます」と職員に話して外出した．ただ，外出するより，友だちが寮に遊びにくることが多く，卓球等に設備があったためこれらを使って一緒に遊んだ．この他，幼児はブランコ，すべり台等で遊び，冬は裏山でソリすべり等を行った．

1951（昭和26）年度の監査報告でも「慰安，娯楽の設備としては，ラジオ，野球具，ブランコ，卓球具，雑誌類で，又家畜山羊一頭，鶏四羽を飼育している．

此の上必要な設備として計画しているものは滑台，ジャングル鉄棒，木馬，積木，紙芝居，オルガン[5]」等があると記してあり，遊具は不足していた．

4時30分掃除（朝と同じ）

5時30分頃夕食，夕食はカレーライス等で，メニューは，保母が立案し，須賀川保健所の栄養士に指導を受けていた．設立当初の食事については，監査でもその充実を次のように指摘していた．

日常の給食は賄費限度額一日一人当り三九円四六銭にて榮養給食に努め主食の加配及びユニセフ脱脂粉乳に補給がある様になって，以来は児童の健康状態も大いに向上し一日平均二，二〇〇カロリーを摂取する様になり現在平均體重は二六・七瓩を示し國内統計平均體重を凌駕している有様である．又一面一般社會も本施設に對する認識を深め同情協力するものもあり，最近當町婦人會を始め近隣婦人會各種団体から衣料品その他食糧等の寄贈がある實況で，此の點洵に欣びに堪えない處である．

（『福島県報』号外1950年12月27日付）

児童の給食は規定賄費現在一日一人當り四五圓九七銭の限度に於て常時新鮮味ある献立を実施している．尚縣からは一日一人當り八〇瓦(ママ)の主食の配給を受けララ物資及び各種地域団体からの協力援助物資等もあるので比較的順調な給食が行われている．全國統計一日當り摂取量標準「二，〇三二カロリー」に對し「二，二五四カロリー」になっている．又地元保健所も常に積極的に指導協力を惜しまず更に給食の研究は續けられている實情である．

（『同』号外1952年9月5日）

7時頃入浴，1日おきに入浴日が設けられ[6]，まず，幼児と保母が入浴し，その後居室ごとに順次入浴した．川上さんや大きい子どもが，小さい子どもの世話をしながら入浴した．入浴までの間は各自自習をし，終ると廊下に置いてあったラジオを聞いた．食堂ができてからは食堂で聞き，1959（同34）年からはいち早くテレビが入った．

9時就寝，着替を枕元にそろえ，パジャマを着て就寝．乳幼児は川上夫人が添寝をして，一緒に寝る時もあった．9時以降が職員の

休息時間であった．なお子どもの私物入れとして，ふとんは押入れ，他は物入れが一つづつあった．

(2)行事，病気，学校との関係

主な行事としては，夏休みの一泊旅行，「劇と音楽の会」，修学旅行等があった．一泊旅行は県事務所（岩瀬地方事務所）の自動車で2往復ぐらいしてもらい岳温泉の泉屋や猪苗代湖に一泊した．

年一回県内の児童福祉施設が集り「劇と音楽の会」を開催し，それにも参加した．職員が毎年いろいろアイデアを出して，いつも他の施設の人たちに素晴らしいと賞められた．学校行事では修学旅行等があり，わずかの小遣を持って行き，帰りにおみやげだといって川上さんの実子等に買ってくることがあった．

冬には，百人一首のカルタ取りが寮内で盛んに行なわれた．百人一首を暗記するのに熱中する者や外の大会に一緒に行く者も出，冬の夜の楽しい娯楽であった．

大晦日になると卒園者がたくさん帰ってくるようになり，この日はそばを食べほうだいにし，子どもたちは腹いっぱい食べた．5月の節句には手づくりのかしわ餅をつくって食べさせた．以上が主な行事の内容である．

子どもたちが病気になると，寝ずに看病することもあり，川上さんの実子なら医者にかけないような病気でも，心配だから負ぶって通院し，子どもの健康には一番気を使っていた．

学校との関係は，父兄懇談会に行ったりして日々連絡を取り，学校の先生方も須賀川寮の子どもたちを差別なく見てくれた．

### 2）川上夫妻の指導方針と姿勢

川上さんの指導方針とその姿勢については御自身の言葉をそのまま紹介する．奥さんは，この考え方に賛成しながら，別の角度からそれを補っていたようである．

「礼儀の面，あいさつの面，服装は与えられたものであっても清潔に，きちんと整理することをしつけました．そうしないと（将来）困るし，他人に迷惑をかけないという気持を植え付けさせました．

だから，（掃除などで）やらなくてはいけないことをやらないとか，やったふりしてやってない時は徹底的に指導しました．逆に，きれいにできた時は賞めてやり，怒ってばかりでなく，ほどほど（冷静）に人（子ども）を知ることです．」（カッコ内筆者加筆以下同様）

「私たちは，してあげたという気持はなかった．してやるべきことを当然やっているんだと．その替り，貰った物を粗末にしたり，名前を書いておくようにと言ったのに名前を書いてなかったり，ここだというところにちゃんと置かなかったり，お風呂も時間制で入ってましたし，掃除なんかでもさぼったりすると倍もやらせました．そうですから，（子どもたちは）与えられたことをきちんとやってました．」また，「（仕事は）ただ与えるだけでなく，確認もし，これはダメ，あれはダメ（とだけ指摘するだけ）でなく，『いいことやった（よくやった）』と賞めるとか．やるべきことを忘れた（時はそれ）ではすませず，罰を与えるよりは（職員も）一緒にやって，『先生がこれだけやってんだから，自分もやらなくてはならない』という気持にする」ように心掛けたようである．

そして，一つ一つきちんとけじめをつけて子どもに伝えて行けば，新しく入った子どもたちもそれを見て身に付けることができること．それぞれの子どもの能力に応じて，その子どもに合う仕事（当番）を与えて責任を持たせ，大きな子どもと小さな子どもを一組にするという方法を取って生活指導を進めた．このため，須賀川寮の廊下や部屋はいつも整理整頓され，床はピカピカに輝っていた．

川上さんの指導方針は，正直な人間，勤勉な人間，自分のことは自分でできる人間，清潔感を持った（整理整頓のできる）人間，責任感の強い人間に育てることにあったと理解でき，そのために，寮での生活も規律正しい，自分のことは自分で行うような生活づくりの姿勢を取ってきたと言えよう．ここには，彼らが将来社会

の中で生活をすることを前提に置いた指導姿勢が見られる．

そして，もう一つ気を付けたことは，我子と寮の子どもを差別なく，接したり，生活したりすることで，両者の衣食を含めていろいろ気使い，常に同じようになるように心掛けていた．特に川上夫人はそれに気使い，我子が生まれても泣いた時以外は我子を抱くことがなく，入ってくる幼児の世話に当っていた．川上夫妻の場合は，我子と入所児が同年齢であったため，子どもたちは一緒に育っていたわけで，我子は日常生活でも学校生活でもいろんなハンディがあったと言えよう．たとえば，親戚からおはぎを貰っても，その場ですぐに我子に食べさせられず，寮の子どもたちがいない時にそっと食べさせたと川上夫人が語っていた．この話の中にも，寮の子どもたちを差別しないようにとの配慮がうかがえる．

なぜ，差別なく一緒に生活しようと考えたのかというと「やっぱり，親がいるといないとでは，子どもから見れば寂しいことですよ．それだから，親に替る者であるべきが自分たちの姿なんだという意識を常に持ってました．」「私たちは，この子ども（養護児）がいるから働いて行けるのだという気持もあるので，かえって子どもたちにとって施設に入ってきたことが幸福だったんだと（思ってもらいたい）．だからこの子どもたちを自分の子どもと差別なくやってあげなくてはならないし，そうゆう面で気を使った．」と話しておられた．子どもたちの立場に立って，我子への愛と同等のものを示すことが，彼らに差別なく接することの原点であると見すえ，ある時はきびしく，ある時は優しく，川上さんは全体的な立場から，そして奥さんは個々人を受け止めていた．彼らはこのような川上夫妻の姿勢に，自然に「おとうさん」「おかあさん」と川上夫妻を呼び，本当の家族になろうと考えて生活をしていたかもしれない．

このような須賀川寮での生活が，退所後の彼らの人生にどう影響したのかをさぐる試みとして，卒園者の事例を次にまとてみる．

## ４．卒園者の事例と寮の想い出

### １）卒園者の事例

川上夫妻が最初に話してくれた事例は３ケースである．筆者からの要望もあり，退所後何度か川上宅を訪れ，今日までの生活が把握できる事例である．今日までお互いに連絡が取り合えるというのは，ある意味で成功例を話してくれたと言えよう．ここでは，彼らの今日までの経過と寮での生活や退所後の川上夫妻との再会等のエピソードから寮の生活が彼らにどんな影響を与えているかをさぐってみる．

(1)　Ａ君の場合

①今日までの経過

Ａ君は，須賀川寮開設当時の1950（昭和25）年２月25日12才で入所した．父は戦死し，母と姉は東京空襲で行方不明となり一家離散し，本児は戦災孤児として浮浪生活を送っていた．浮浪生活中は，東京，青森，北海道を汽車で行ったり来たりして生活していたようである．当時の浮浪児仲間では，このような生活が他にも存在[7]していたところから見てあながちウソではないと言える．

しかし，青森でＦ氏の同情を受けて，Ｆ氏と一緒に福島県のある町で生活し，小学校に通学していた．この間，姉の所在が分り照合したが貧困で引き取れず，一方，Ｆ氏も家庭不和のため，Ａ君を児童相談所に依頼し，須賀川寮に入所した．

入所後の生活は，開設して最初の児童で，12才であったので，小学校６年に編入した．しかし，入所後すぐ病気で一ヶ月間入院し，その後退院し，次々と入所する子どものリーダー的立場で寮での生活を送った．中学に入ってからも成績が非常に良くトップであり，水泳，マラソン，柔道等のスポーツをやっても一番であったので，学校の先生方も彼の教育には力を入れてくれた．性格は正義感が強く積極的であった．

このため，本人から高校に行きたいとの申出があり，須賀川寮では進学体制がなく，中学３

年の3学期にH養護施設に措置替えをした．在寮期間は2年10ヶ月である．

その後，高校に入学し，卒業と同時にH養護施設を退所し，航空自衛隊に入隊した．除隊後，結婚し現在は自ら会社を営み，家族と円満な生活をしている．川上夫妻のところへは2回ほど訪れ，年賀状等の連絡は欠かさない．

②エピソード

彼は，入所当初，前の環境もあって生活等の面でルーズなところがあった．しかし，寮での規則正しい生活にすぐ適応し，けじめのついた生活を学んだ．勉強はでき，川上さんの実子と一緒に学習したりし，寮の子どもたちのまとめ役として育っていった．

中学2年の時，ただ生意気だということで，他校の中学生グループ5，6人に待伏せされ，逃げ帰ってきたが，途中でつかまり暴力を振ったので，彼1人で対抗した．その時，彼は柔道の心得が多少あったので，1人を倒しケガをさせてしまい，他の子どもたちは驚いて逃げてしまった．このため，彼はケガをした生徒を家庭まで送り，家族に謝って帰寮した．帰寮後，彼の様子がおかしいので，川上夫人が尋ねたら，正直に事情を報告したので，職員と一緒にケガをさせた相手の家にお詫びに行くと同時に，両方の中学校にも事情を報告した．

このエピソードは，彼の正義感の強い性格と須賀川寮の他人に迷惑をかけない，人を傷つけない，自分のやったことは自分で責任を持って対応するという指導を地で行く出来事と言えよう．

このことを学んでか，ある時，小さな子どもが近所の子どもとケンカをして帰ってきたのを見て，「ケンカをしてはダメだ」と話し，相手の家に子どもと一緒にあやまり（お詫び）に行ったというエピソードもある．この二つのエピソードは，川上夫妻が関連づけて話されたものでなく，どちらが先で，どちらが後か分らないが，いずれにしても，彼の素直で正義感の強い性格が寮の指導を通して一層大きく育って行っていたことを示す出来事と理解できる．

川上さんから見て，彼が須賀川寮に入って良かった点は何かを尋ねると，「衣食住がたりたこと」「自分の相談相手ができたこと」とだけしか語らず，「それは本人が感じることで私が話すことではない」という主旨のことを言われた．現場で働く者から見れば，彼らの人生に自分のやったことが投影されているのであって，それをいちいち意義付ける必要はないとの思いがその言葉の奥にあると感じた．ただ，あえて彼が須賀川寮で生活した意義を考えてみると次のようなことが言えよう．彼は入寮前他人の家で肩身の狭い思いで生活をしていたが，須賀川寮に入り，自分のために衣食住があるという生活をおくる中で，彼の気持が解放され，安心して生活できる場所はここだという安心感が生れたであろう．また，親身になって相談相手になってくれる「おとうさん」「おかあさん」等の職員がいたことで，彼の心の強い支えなったことが，彼を一層正義感の強い，勉強も出来る人間にしたと言えよう．

次に，退所後のエピソードを見ると高校卒業後H施設を退所し，航空自衛隊に入隊するが，間もなく制服を着て須賀川寮を訪れている．たぶん真先に須賀川寮を訪れたのであったろう．その時の印象は「ぼくは，こうゆうふうになりました」と川上夫妻に報告に来たという感じがしたと語っている．二回目に訪れたのは，結婚してからで「昔の仲間の話をして帰った」ということである．

彼は，須賀川寮には2年10ヶ月しかおらず，高校3年間はH施設で生活した．それにもかかわらず，自分が就職したら真先に須賀川寮を訪れ，「ぼくはこうなりました」と報告に来ている．この行動は何を意味するのだろうか．両親のいない彼にとって自分の成長を見ていてくれるのは，須賀川寮の川上夫妻であり，自分の姿を見てもらうことで，安心してもらおうとしたのであろう．彼にとってこの行動は，育ててくれた「両親（川上夫婦）」への感謝の気持の表現であると同時に，今後とも自分のことを見守っていてほしいという願望でもあったと理解した

い．人は，だれかに見守っていてもらえるから逸脱した行動を自己コントロールし，より前向な人生を送ろうとする．両親等の身内がほとんどいない彼にとって，その替りになりうるのが川上夫妻であったと言えよう．

彼の中で川上夫妻は今も生きており，彼の支えになっている．いつも，遠くで川上夫妻が見守ってくれているとの想いが，彼の生活を一層前進させる方向に作用し，須賀川寮の生活は川上夫妻を媒介として今も彼の生きる力の一部として現実のものとなっているであろう．特に，結婚以前の彼にとっては，その比重は大きかったであろう．このように，彼のライフステージの中で，須賀川寮での生活が一つの生活体験として影響を与えていると同時に，川上夫妻を通して，彼が生きている今も影響を与えていると言えよう．この事例から学ぶことは，身内の少ない養護児の場合は，彼のライフステージに合せてその一生を直接，間接，又は物的に，精神的に多様に支援して行くことの重要性が理解できよう．

(2)Ｂ君の場合

①今日までの経過

Ｂ君は，母親の事情で出生後，子どものいないＤ夫婦の養子となった．Ｄ夫は日雇で生活を立ててきたが妻と離婚してしまい，本児を弟夫婦にあずけ行方不明になってしまった，弟家族は自分たちの生活で精一杯で，本児を育てる自信がなく，児童相談所に願い出て，1951（昭和26）年10月６才で入所した．

入所前に転車台に挟まれる事故で大腿部より臀部にかけて外傷を負い，肛門括約筋が弛緩し，無意識に排便が出る状態であった．このような障害に加え，入所当時は無口，無表情，内向的な性格で，ＩＱ70という判定であった．

入所後は，排便のしまつを教え，だんだん自立すると共に性格も明るくなり，冗談も言えるようになり，学校の成績も小学校低学生のうちは下位にあったが，６年ぐらいからいくらか向上し，中学２，３年ごろには中程度に達した．

中学卒業後退所し（11年５ヶ月在寮），東京都内の鉄工所に就職．職場では我慢強く，真面目で，１日も休まず働いたため，工場長に信頼され，工場長の勧めで結婚した．結婚の時家を新築し，その後も同鉄工所で31年間勤めている．家族も妻と３人の子どもがおり，川上夫妻は，本人の結婚式，本人の長女の結婚式に招待され，工場長夫妻を含め家族ぐるみで付き合いが続いている．

②エピソード

入所時は，無口で暗く，甘えることを知らない，子どもらしさのない幼児であった．このため，何とか話ができるようになるよう心掛けた．排便が無意識に出る点については，幼児のうちは職員がしまつをしたが徐々に「職員に言われなくても，汚れたパンツを取り替え，（パンツは）バケツに浸しておけば，私（川上夫人）が洗ってやるから」と話し，自分でできた時には「オダチン（お駄賃）」をやったりして，１人でしまつできるようにし，小学５年生ぐらいには自立した．

一方，無口な性格も小学３年生ぐらいから「ニヤ」と笑うようになり，だんだんちょっとした冗談を言ってみんなを笑わすようになった．中学生ぐらいになってからは，小さい子どもの面倒見がよく，小さい子どもに慕われ，寮内での良きリーダに成長した．

このように入所時，無口で子どもらしさもなく，知能も低と見られた本児が，須賀川寮の生活の中で明るくなり，リーダー格にまで成長したのは，なぜだろうか．それは，彼にとって須賀川寮が，乳幼児期に体験できなかった甘えを満足させてくれる，川上夫妻を始めとする職員がいたこと．そして，同年齢の仲間や年上の仲間と触れあい遊ぶ体験を数多く持つことができたためと考えられよう．

本児は，乳幼児期母親等からのスキンシップを十分体験できず，愛情を体得できないまま育ったことが，無表情で一見知能が遅れているかのように育ってしまった原因である．それに排便をもらすことが加わり，そのままの状態であったら友だちにバカにされ一層性格が歪んだであ

ろう．それを許さず，小さい子どもや弱い子どもをいじめない，子どもを差別なく育てるという川上夫妻の考え方が，彼の乳幼児期のハンデキャップを克服させ，中学生の頃には正常な人格や学力を持てるまでになったと言えよう．これは，須賀川寮に「おとうさん」「おかあさん」を中心とする大家族的な教育力が内在していたからであり，彼にとっての須賀川寮での11年間の生活は，ある意味でまさに家庭での生活であり家族との生活であったと言えるかもしれない．

就職後も，彼は正月になると毎年たくさんのおみやげを持って須賀川寮を訪れ，子どもたちの世話をした．子どもたちも彼の来るのを待ちこがれ，「ぼくもあのような兄ちゃんになるのだ」と言われるほどであった．

また，結婚式には，川上夫妻が立会人として招待され，新築されたばかりの家に一泊した．結婚式での祝辞の時は，本人が施設のことをどこまで知らせているかを確認したうえで話すそうだが，彼の場合は関係者がそれを知っているので，「先生」という立場で祝辞を述べたということである．先年には，彼の長女の結婚式にも招待されたということである．彼もまた，川上夫妻に自分の人生をいつまでも見守っていてほしいと考え，それを結婚等の彼の人生の節目となる行事に招待することで，自分の想いを伝えていたと言える．就職後も須賀川寮は彼にとって家庭であり，家族であった．正月におみやげを抱えて寮の子どもたちに持ってきたのもその現れであり，彼も兄(あにき)らしさを演じてみたかったのであろう．

もう一つ重要なことを付け加えるならば，彼が職場で我慢強く，真面目で，１日も休まず，工場長に信頼を受けたのは，彼の元来の性格を良い方向に改善した須賀川寮（川上さん）の指導方針と姿勢があったことも見逃すことができない．

(3)Ｃ君の場合

①今日までの経過

Ｃ君は，東京近辺で叔父と一緒に魚つりに川に出かけ，叔父が目を離している間に，釣竿だけおいて行方不明になってしまった．本児は言葉もはっきりせず，知能も少し劣っていたため，道に迷い帰る方向を忘れ，都内の電車を無賃乗車し，たまたま上野駅から東北本線に乗り込み，無賃乗車で捕まり郡山駅で下ろされた．その後約２年あまり市内の寺等の床下等で生活していた．

しかし，市内を放浪中市役所職員に保護され，児童相談所を通して1950（昭和25）年７月須賀川寮に入所した．推定年齢９才．入所当時は，言葉がはっきりせず，身体ばかり大きくて動作も鈍ぶく，ＩＱは74位で，他人のものを盗む傾向も見うけられた．同年９月に小学１年に入学し，寮では当初夜尿もあり，生活指導を中心に行い，川上さん家族や仲間たちと接する中で徐々に成長して行った．

1956（同31）年朝日新聞社の親捜し運動に応募し，親が名乗り出，同年３月退所した．在寮５年８ヶ月．退所後は実家に引き取られたが，なかなか親になじめず，須賀川寮が恋しくなり無賃乗車で３回ほど来寮した．寮が閉鎖する時も，その事を知るや来寮し心配してくれた．現在は，親から独立し関西方面で生活しており，必ず年賀状を送ってくる．

②エピソード

入所当初は，山下清のような風貌で，入浴の仕方等の生活面の指導から始め，川上さんの子どもを兄弟のように思って育った．

小学３年の修学旅行で南湖公園に行った時，川上さんの次男（幼児）にボンボンをおみやげとして買って来た．なぜ，自分のものを買わなかったのかと聞くと「みんなが兄弟に買ってやっているので，自分にも兄や弟がいると思って買ってきた」と言ったそうである．彼にとって川上さんの次男は自分の弟のように思っていたようで，川上夫人が洗たくをしている時などは，彼がその弟をあぶなくないように見守ってくれ，「これがぼくの仕事だ」と思っていた．

彼は，少し知能が低く，動作が鈍ぶかったが，川上さんの次男を見守る（世話する）ことが自

分の役目だと考え，川上夫妻もそれが彼の仕事だと認め，彼を信頼してお願いしたそうである．このため，彼は自分が川上さん家族の一員のように思いこんでいたようである．須賀川寮には，本人の能力に合った役目（仕事）があり，彼もその仕事をまちがいなく実施することで，家族の一員と実感したのであろう．

退所後も無賃乗車で3回も訪れているが，実親は「（私たちのことを）一回もおとうさん，おかあさんと呼んでくれなかった．須賀川寮のおとうさんおかあさんを自分の親だと思っているようです」と話していたそうである．また，寮の閉鎖を聞いて，自分と一緒に遊んだ仲間が分散してしまうことを聞き，心配して来寮し大変残念がったと言う．

彼は，退所後も，須賀川寮と川上さん家族を本当の家庭，家族と考え，実親を里親と認識していたようである．知能が少し低いからか，7才ごろまでの東京での生活をほとんど覚えておらず，9才ぐらいから5年8ヶ月（14才ぐらい）暮らした須賀川寮の生活が彼の原点となってしまった．それは，いろんな能力を持つ子どもも受容できるような人間関係と役割分担が内包された大家族的な生活が，須賀川寮に存在したためであろう．

### 2）寮の想い出

卒園者が就職し，須賀川寮や川上さん宅を訪れた時，寮の生活等でどんな想い出を語るのだろうか．この想い出の中に，彼らにとっての養護施設の役割が潜んでいると理解し，それをまとめてる．

正月になると退所して就職した人がたくさん須賀川寮に帰ってきた．多い年には20人ぐらい集まった．立派になった彼らを見る子どもたちは「自分もあようになるんだ」「なれるんだ」と考え，彼らは将来の子どもたちの見本であった．同時に帰寮した彼らがなつかしがるのは，「このおかあさんのたくわんが食べたかった．」夏休みみんなで行った一泊旅行，「劇と音楽の会」で役付きになったこと，冬の夜一生懸命覚えた百人一首のこと等，食べ物の思い出や彼らが熱中したことで，これらがいつまでも印象深い想い出として残っているようである．

また，ある者は，学校帰り，どうしてもひよこが買いたくて，30分も道くさして帰ってきた．「その時『おかあさん（川上夫人）にひよこ買ってほしい』と言ったら，（ダメだと思っていたのに）3円くれてひよこを買ってきて，自分のふとんの綿を取り出して育てたが，あの時（おかあさんから）もらった3円が今でも忘れられない」と語ったと言う．

このように，おふくろの味，自分が熱中したこと，そして，個別に受けた愛，それらが就職後の彼らの脳裏にも深く刻まれているようである．このような快い（感動）体験を持ち続けることが，就職後たった1人で歩まねばならない彼らの人生を支えていたのかもしれない．人間は，過去にどれだけ感動的な体験を持っているかで心の豊さも変ってくると言われる．感動的な体験（想い出）は心の栄養であり，苦しい時，悲しい時の心の支えでありふるさとでもある．彼らは，いつも心の支えとふるさとを須賀川寮の想い出の中に求めて生活し，彼らの人生を築いて行ったと理解できないだろうか．

## 5．まとめ

須賀川寮の内容と役割について，設立以来15年間子どもたちと向き合い，閉鎖後も彼らを見守ってきた川上夫妻のお話を基にまとめてきたが，最後にそれを要約すると次のようになる．

① 須賀川寮は戦災孤児，引き揚げ孤児を中心に，彼らを大家族的な暮らしの中で育てた施設であった．川上夫妻が「おとうさん」「おかあさん」役とし，他の職員は叔父さん，叔母さん役で，彼らと川上さんの実子が兄弟姉妹であった．当初定員20名で始り，これが大家族的な暮らしを可能にし，その期間が長かったために40名になっても，この伝統は続いた．

両親等の身内がほとんどいない（行方不明）彼らにとって，大家族的暮らしはスンナリと

受け入れられ，就職後も，家庭を持ってからも，須賀川寮の体験が心の支え（ふるさと）であった．また川上夫妻がいつまでも自分を見守ってくれる両親的存在であることを意識的にも，無意識的にも求めていたふしがある．もっと大きな規模の施設で，来園しても直接担当の職員がいない施設だったら，彼らにとってこの関係は成立しにくかったと推測する．

今日の養護児は親や家族が存在し，事情は違うが，戦後のあの時期の養護児にとって，両親，兄弟姉妹等々のいろんな役割を持った存在を疑似体験できる大家族的な施設形態は，彼らが将来家族を作る場合等に非常に有効な見本たりえたと言えよう．これは，今日の養護施設の役割を考える時に，その時代の養護児に何が必要か，そのための施設形態はどうすべきかを前提に施設運営がなされることの重要性を教えてくれていると言えよう．その中には，卒園後，就職後，結婚後も，彼らのライフステージを見据えた多様な援助形態が必要で，それが彼らの人生を支えて行くことをも含まれる．（川上夫妻は個人的にその役割を演じたが）

② 川上夫妻が，指導（養護）の基本に置いたのは，正直な人間，勤勉な人間，自分のことは自分でする人間，清潔を持った人間，責任感の強い人間であった．社会の中で影ひなたなく勤勉に働き，人に迷惑をかけない社会人の育成が，大家族的な須賀川寮の中で自然に「家の伝統（文化）」として感化されて行くシステムがつくられたようである．

このシステムは，今日の大舎，中舎の養護施設にはない，小舎のそれか，ファミリーグループホームに近いものと言えよう．当然，養護の内容は，時代によって変るが，「家庭」というシステムが彼らに必要だとすれば，それは継承しつつ発展させる必要があろう．

③川上夫妻が，なぜ，この仕事を続けたのかというと，「戦争中外地（満州）で，家内が身おごで１ヶ月後にお産，長男が病気で入院，私に召集令状が来てシベリアに行ってた．その間に子どもが生れたわけで，家内が病気でもして死んだら，子どもは戦災孤児になっていたかもしれない．戦災孤児は，中国人に売られたり，育てられたりしており，自分の子どもも同じ境遇になる可能性があった．（だから）須賀川寮に入る子どもたちを他人の子どもとは思えない．」という想いが川上夫妻の仕事の原点にあった．だから，我子も，須賀川寮の子どもも差別しないで育ててきたし，彼らもそのことを強く感じたであろう．

人を育てる仕事は，育てようとする側が自分に対しきちんとした信念を持ち，それに基く養護が実施される時，彼らが共感し一緒に暮らそうとするのではあるまいか．それが，彼らを生涯結びつけるカギかもしれない．

## おわりに

川上夫妻に話を聞きながら，筆者はさかんに，「なぜ，彼らがそのように育ったのか」「どうして，そうなったのか」と質問したが，やんわりと「理屈じゃありませんよ」と言われてしまった．自分のやったことにほとんど意義付けをせず，彼らの秘密を厳守しながら，川上夫妻が体験したたくさんの事象や事例を話してくれた．

今後の課題としては，須賀川寮の歴史的な役割を分析することがある．戦後処理型の施設であったと言えるが，その詳しい役割等を明らかにできればと考える．

いずれにしても，川上さん御夫妻に心より感謝申し上げると同時に，今後の協力もお願いいただければ幸である．

**〈註〉**

1）飯田進他共著『養護内容総論』198頁　ミネルヴァ書房　1991年

2）『須賀川市史』現代２　291頁　須賀川市教育委員会，1972年３月

3）『福島県報』号外　50頁　福島県　1940年12月27日付

4）『同』号外　21頁　福島県　1956年１月７日付

5）『同』号外　77頁　福島県　1951年12月28日付

6）「収容児童の入浴は隔日に実施しており体重は毎月正確に測定している．昭和二十六年の実績は体重増一人平均二瓩強と云う成績を示し保健状況は良好である．又昭和二十七年四月から嘱託医を委嘱した．」『同上』 29頁　福島県　1957年9月5日付

7）「それから　伊藤幸男さん（57）元靴磨きの浮浪者①」『朝日新聞』 1992年8月18日付．伊藤氏の場合は，東京と沼津間を往復し，列車の中が宿泊場所となっていた．